A Bride in Underground-Castle

地底魔城の花嫁　1

芳流（kaoru）

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=19552637

ダイの大冒険, ヒュンケル, マァム, ヒュンマ, モルグ, まおしゅう

もし、地底魔城の闘技場で決着がつかず、ヒュンケルが不死騎団長を続けていたら、から始まる物語です。
闘技場の途中で、正規ルートから外れていきます。
ヒュンマになるはずですが、まだこの時点では、ヒュンケルとマァムは、思いきり対立しています。
とりあえず、きりのいいところまで。

2023.3.25魔王軍webオンリーイベント「魔王軍だよ全員集合！２」合わせ。
2024.3.27とてもありがたいお宝を掲載。
2024.3.31お宝掲載し直し。

＊お宝は、５ページ目下にあります。すごいですよ！！！！！！！
脳内イメージのビジュアル化がこれほどまでに破壊力があるとは・・・！
めちゃめちゃ素敵なので、是非、ご覧ください💗💗

地底魔城の花嫁　1

　雷雲が低く垂れ込める闘技場に、稲光のように剛剣が走った。
「ブラッディースクライド！！」
「ダイーッ！！！！」
　ヒュンケルの渾身の一撃がダイを貫くと同時に、地底魔城の闘技場にポップの悲鳴が響き渡った。
　ポップは動かない身体を押して、ダイの元に駆け寄った。
　そこに、ヒュンケルの無情な宣告が響き渡った。
「無駄だ。もう助からん。」
「うるせぇ！」
　せめて、ふたりまとめて始末してやるかと思い、ヒュンケルは、剣を構えた。それに気付き、ポップは、ダイを背中にかばった。
　眼前に向けられた銀色の先端に、ポップは、ごくりと息を飲んだ。
―・・・ここまでか・・・！
　ポップが冷や汗を覚えたそのときだった。
「つまんねえなあ。」
　突然、闘技場に、第三者の声が響き渡った。
　ポップもヒュンケルも、同時に視線を上に向けた。
　見ると、すり鉢状になった闘技場の最上段の観客席の上に、一人の男が立っていた。
　その姿を認めると、ヒュンケルは忌々し気にその名を呼んだ。
「何をしに来た、フレイザード。」
　フレイザードは、悪びれもせずにヒュンケルに答えた。
「別に、なんてこたぁねえぜ。てめぇの戦いっぷりを拝みにきたってわけよ。不死騎団長サマよぉ。」
　ヒュンケルは、フレイザードから視線を外し、倒れたダイを見据えたまま、フレイザードに呼びかけた。
「帰れ。勝負はすでについた。
　勇者ダイは倒れたとバーン様に報告しろ。」
　フレイザードは、いかにも面倒な様子で、片手を振りながら答え

た。
「ああ、ああ。言われなくてもそうするよ。
　ただし！」
　突然、フレイザードが語調を変えた。
「報告はこうだ！！
　勇者ダイを倒したのは、この俺様だってなあ！」
　その言葉と同時に、メラゾーマの炎が闘技場に降り注いだ。
「うわっ！」
　ポップが悲鳴を上げながら、ダイに覆いかぶさり、炎からその身を守った。
　ヒュンケルは、自身の剣で炎を切り裂きながら、フレイザードをにらみ据えた。
「何のつもりだ、フレイザード！」
「てめぇは気に入らねえんだよ、ヒュンケル。
　人間のくせによぉ！
　ここで勇者ともども沈んじまいな！」
　フレイザードがさらに、メラゾーマの雨を降らせる。ヒュンケルの注意がフレイザードに注がれた。
　その隙を、ポップは見逃さなかった。
―・・・いまだ！
　ポップは、ポケットからキメラのつばさを取り出すと、天に向かって放り投げた。いざというときのために、バダックから渡されていた道具だった。
　ダイを抱きかかえたポップの姿が、流星のように闘技場から飛び立った。
「なっ・・・！」
　ヒュンケルが追撃しようとしたが、遅かった。
　その軌跡を見送りながら、フレイザードはぼやいた。
「チッ・・・キメラのつばさかよ。用意がいいな。」
　ヒュンケルは、フレイザードをにらみ据え、同僚の軍団長であるその男に厳しい視線を送った。
「フレイザード、今回のこと、バーン様に報告させてもらうぞ。
　今後は一切、この城に近付くな。」

「勝手にしろや！」
　フレイザードは、面白くなさげにそう吐き捨てると、彼自身も、キメラのつばさを取り出し、天に投げた。
　動く者のなくなった闘技場の床を見つめ、ヒュンケルは、ちょうどダイが倒れ伏していたあたりを注視した。
—・・・血の痕が・・・ない。
　躱したのか。
　一撃必殺であったはずのヒュンケルのブラッディ—スクライドでダイを仕留めそこなったことに気付き、ヒュンケルは、腹立たしげに踵を返した。

　武装を解いたヒュンケルが地底魔城の中に戻ると、そこでは、ひと騒ぎ起きていた。
「はなしてっ！！」
　地底魔城の廊下で、ミイラ男がマァムを捕らえ、その腕を後ろにねじり上げていた。腕を縛って地下牢に放り込んでいたはずの人質が、いつの間にか、拘束を外し、牢の外へと出ていた。
「どうした。」
「これは、これはヒュンケル様。お騒がせして申し訳ございません。」
　ヒュンケルに気付くと、モルグは丁寧に頭を下げた。
　マァムもまた、彼の姿を認めると、食って掛かったように叫んだ。
「ヒュンケル！
　ダイは・・・ポップはどうなったの！？」
　だが、ヒュンケルは、マァムの叫びを無視してモルグと会話を続けた。
「逃げられたのか。見張りはどうした。」
「それが、呪文でドアを破った後、通気口から逃げたようでして。申し訳ございません。」
「油断したな。」
　自分を無視するヒュンケルに、マァムは注意を引き付けるべく叫んだ。

「ヒュンケルっ！！」
　途端に、ヒュンケルの冷たい眼差しがマァムに注がれた。その厳しい視線にマァムは息を飲んだ。
　だが、彼女もアバンの使徒だ。臆することなくヒュンケルに問いただした。
「ダイは、ポップはどうなったの！？」
「逃げた。」
　ヒュンケルは、簡潔にひとことだけ答えた。意外な答えに、マァムは虚を突かれた。
「だが、お前がここにいる以上、あいつらはまた挑みに来るだろう。お前を取り戻すためにな。
　それまで、もうしばらくここにいてもらおう。」
　マァムは、背に冷や汗が伝うのを感じながらも、精いっぱいの強がりで顔を上に向けた。ヒュンケルを見上げたまま、見据える。
「いいの、そんなことをして。私が大人しくただ捕らえられているだけだと思うの？」
　だが、ヒュンケルは余裕の笑みを崩さない。
「ほう、威勢のいいことだな。それがアバンの教えか？」
「そうよ、どんな状況でもあきらめない！私だって、どんな状況だって自分のできることをするわ！！」
「ならば、どうする。俺の弱点でも探るのか？」
　マァムはぐっと息を飲んだ。言い返せなくなって言葉に詰まる。
　ヒュンケルは、冷笑を浮かべ、マァムを嘲った。
「そういうことは、隠れてやるものだ。馬鹿正直に宣言するものではない。
　アバンはお前に戦略は教えなかったのか？」
　だが、マァムも負けてはいない。ヒュンケルを見据えたまま、言葉を返した。
「貴方こそ、アバン先生に何を教わったの？教えられた力を正義のために使うことを教えられたんじゃなかったの？」
「アバンの正義など、俺にとっては敵でしかない。
　その正義の名のもとに、アバンは俺の父を殺したんだぞ！
　それだけではない。

あの男のために、この地底魔城にいたモンスターたちは死に絶えた・・・。
　あの男の正義など、しょせん、お前たち人間どもにとってだけの正義にすぎん。」
「違うわ！！アバン先生は本当にみんなのために戦った・・・平和を望んでいたのよ！それは、人間だけじゃない！先生は魔族やモンスターのことだって、気にかけていた。そんなことは、私の父さん、母さんからも聞いている！」
　マァムの言葉に、ヒュンケルは、ぴくりと眉を動かした。
「私の父さん、母さんはアバン先生とともに戦ったわ！だからよく知っている！アバン先生は、みんなの・・・ううん、子どもたちのためにハドラーと戦ったのよ！きっと、あなたのことだって・・・。」
「黙れっ！！」
　ヒュンケルは、ひとことで、マァムの言葉を制した。また殴られると思ったマァムは、反射的に身をすくめた。
　だが、衝撃は来ない。
　ヒュンケルは、怒りに満ちた眼差しでマァムをにらみつけていた。
「あの男のことは、口にするな・・・！」
　そして、ヒュンケルは、己の怒りをねじ伏せると、マァムに問いただした。
「それより、お前・・・お前の両親は、アバンの仲間だったのか？」
「そ、そうよ。」
　ヒュンケルは、マァムに腕を伸ばすと、その顎に手をかけた。強引に、自分の方に向かせる。戸惑うマァムの視線と、嘲笑を浮かべたヒュンケルの眼差しが交錯した。
「・・・面白い。お前は正義の使徒のサラブレットということか。その立場、せいぜい使わせてもらうこととするぞ。」
「なっ・・・！」
　ヒュンケルは、マァムから手を放すと、今度は、あらぬ方向に向かって呼びかけた。

「それから、服の中に隠れているものがいるな。出てこい。」
　マァムは身を震わせた。
　マァムの服の下には、小さな仲間が潜んでいた。
　ヒュンケルは、マァムに冷たい視線を投げかけると、宣告した。
「早くしろ。
　出てこなければ、この女の服を引きちぎっても引きずり出すぞ。」
　本気でそうしかねない迫力に気圧され、ゴールデンメタルスライムの小さな彼は、おずおずとマァムの服の下から顔を出した。
　マァムは悲鳴を上げた。ヒュンケルの手が、その羽をつかんだ。
「ゴメちゃん！」
「こいつか・・・。
　牢から逃げられたのも、こいつがいたから・・・か？」
　マァムは身をよじって叫んだ。
「やめて、ゴメちゃんには何もしないで！」
　すると、その翼をつかんだまま、ヒュンケルはマァムに問うた。
「ならば、お前がここに残るか？逃げ出さないと約束するなら、こいつは見逃してやろう。」
　そのことばに、マァムは飛びつきそうになった。なんとしても、この小さな仲間は逃がしたい。だが、ヒュンケルを信じてよいものか。
　マァムは、慎重に言葉を選んだ。
「・・・本当に？」
「父の教えだ。二言はない。」
　敢えて、バルトスの名をあげたヒュンケルの言葉の裏に、マァムは、彼の誠意を感じ取った。彼女は、うなずいた。
「・・・わかったわ。」
「ピピーッ！」
　ゴールデンメタルスライムの抗議の悲鳴が響いたが、マァムは首を縦に振った。
　ヒュンケルは、その翼から手を放した。
　金色の小さなスライムは、マァムの周りを飛んで叫んだ。
「ピッ！ピピッ！！」

泣き出しそうなその面に額を寄せ、安心させるように、マァムは囁いた。
「私は大丈夫よ、ゴメちゃん。それより、早く逃げて。ヒュンケルの気が変わらないうちに。」
「ピーッ！」
「早く！」
　マァムは、押し出すように、叫んだ。
　ゴールデンメタルスライムは、名残惜し気に何度も振り返りながら、通気口の中に姿を消していった。
　マァムは、その後ろ姿を見送ると、ヒュンケルに毅然とした眼差しを向けた。
「あの子に手を出さないで。」
「無論だ。俺もそこまで落ちぶれてはいない。
　むしろ、この段階で出て行ってもらいたかったのは、こちらの方だ。あのモンスターに、外との伝書鳩をされたら敵わんからな。」
「・・・そこまで考えていたのね。」
　ヒュンケルは、悠然とした笑みでマァムを見下ろすと、嘲るような口調で言い放った。
「お前こそ、約束は守ってもらうぞ。
　お前は人質だ。
　ダイたちがまたここにやってくるまで、この城にいてもらう。
　違えようものなら、正義の使徒の名が泣くぞ。」
「・・・わかっているわ。」
　ヒュンケルは、振り返らずにモルグに指示を下した。
「見張りは倍に増やしておけ。何をするか分からんからな。」
「はっ。」
　主からの下命に、モルグは恭しく頭を下げた。

　ヒュンケルは、執務室でパプニカ王国の地図を広げながら、部下からの報告を聞いていた。
　これまでの集めた情報からすれば、パプニカ王国の王女レオナは、生き延びていることに間違いはなかった。だが、その行方は知れていない。

勇者ダイの方も動きはない。
どの方面に不死騎団を動かすかと思案に暮れていたそのとき、執務室のドアがけたたましく開かれた。
「た、大変でございます、ヒュンケル様！！」
普段は落ち着き払っているモルグが、血相を変えて駆け込んできた。
ヒュンケルは厳しい眼差しをモルグに向けると、熟練の執事に問いただした。
「何事だ、モルグ。お前らしくない。」
「申し訳ございません。」
「何が起こった。」
主にたしなめられたモルグは、少し落ち着きを取り戻したようだった。
モルグは、軽く咳払いをすると、居住まいを正してヒュンケルに向き直った。
「申し上げます。
パプニカ王国の残党が、蜂起いたしました。
旗印は、王女レオナ。
アバンの使徒たち、勇者ダイも合流したそうです。」
「・・・なんだと。」
ヒュンケルは眉をひそめた。
不死騎団の側が王女レオナの行方を探し出し、攻め入る前に、向こうから蜂起をするとは、ヒュンケルにとっても予想外だった。
「そんな体力が残っていようとはな。
場所はどこだ。」
「パプニカ北東部です。」
モルグの報告に、ヒュンケルは、パプニカ王国の地図を見直した。パプニカ北東部には森が広がっているが、そこはすでに捜索したはずだった。
ヒュンケルは、地図をなぞり、パプニカ北東部から指を上に動かした。
「・・・島にでも隠れていたか。
だが、それならば、何故わざわざ出てくるような真似

を・・・。」
　ヒュンケルは、再度モルグに尋ねた。
「数は把握できているか。」
「はい。
　とりあえずのところは、３００程度かと思われます。
　しかし、パプニカ全土に向かって、魔王軍に立ち向かおうと呼びかけているとのことです。勇者が味方だ、いまこそ、魔王軍に立ち向かうときだ、と。」
「・・・なるほど、そういうことか。」
　モルグの報告に、ヒュンケルは、合点がいったようにうなずいた。主の意図が読み切れず、モルグは、不思議そうに尋ねた。
「ヒュンケル様？」
　ヒュンケルは独り言のようにつぶやいた。それは、彼の知識と経験から導かれた戦況分析であった。
「島に隠れていた方が安全だろうに、わざわざ大陸に出てきてまで蜂起をしたのはそういうことか。
　パプニカ王都での戦いで散り散りになったパプニカ軍を再結集し、民衆にも武器を持って戦うように呼び掛けているのだな。それも、勇者と同流したゆえか・・・。
　なるほど、勇者、アバンの使徒の名はよく効くな。」
　ヒュンケルは、口の中で低く笑った。
　彼が捨てたアバンの名。自分たちを鼓舞する力として、何の実質もないはずのその名に縋ろうとしている人間たちが、いっそ滑稽に思えた。
　モルグは主に尋ねた。
「いかがなさいますか？」
「蹴散らせば済むことだ。どちらにしても、王女レオナを捕らえなければ、この戦いは終わらん。向こうから居場所を明らかにしてくれたんだ。この機会を使わせてもらおう。」
「はっ。」
「それと、もう一つ。
　こちらからも触れを出す。
　鬼岩城にも上申するぞ。」

ヒュンケルは、モルグをまっすぐに見据えると、その目の奥に強い輝きを見せ、不敵な笑みを浮かべた。
「向こうがそのつもりなら、こちらにも考えがある。
　人間どもの戦意、削いでやろうではないか。」

　マァムは、牢の外に、複数の者の気配を感じた。
何事だろうと、後ろ手に縛られたままの不自由な体を起こし、扉の上面に設けられた窓から外を覗こうとした。
　すると、急に、その扉が開かれた。寄りかかっていた扉を失い、マァムは倒れそうになった。慌てて何とか体を支えると、目の前には、モルグが立っていた。モルグの背後には、がいこつ剣士やミイラ男たち、見慣れた不死騎団のモンスターたちが何人も控えていた。
「おや、お嬢さん。準備の良いことですな。」
「え？何が？」
「お迎えに上がりました。ささ、行きましょうか。」
　モルグは、何の理由も告げないまま、マァムを促すと、牢の外へと連れだした。
「え？何？」
　マァムはモルグに尋ね返したが、老獪な執事は何も答えなかった。

　マァムは、訳も分からないまま、地底魔城の一室に通された。
　モルグがドアを開けると、上質な調度の揃った部屋が姿を現した。
　一揃えのダイニングセットには、繊細な装飾が施されており、テーブルの上には、レースで飾られたテーブルクロスが敷かれていた。その上には、燭台に備え付けられたキャンドルが置かれていた。
　そして、部屋の中には、同じワンピースを身にまとった女性たちが数人おり、皆、一様に、マァムに頭を下げた。
　よく見ると、女性たちの肌は蒼かった。
　魔族なのだろう。

ひとりだけ、マァムと同じ白い肌の娘がいたが、その他の女性たちは皆、魔族を思わせる肌の色と、耳の形をしていた。
「さて、皆さん。
　よろしくお願いいたしますぞ。」
　モルグが女性たちに声を掛けると、女性たちの中心にいた娘が、モルグに問うた。
「このお方でございますか。」
「左様。
　お願いいたしますぞ。」
「かしこまりました。」
　マァムにはわからないやり取りが続いていく。
　モルグは、マァムの手首の縄を解くと、そのまま廊下へと出ていった。
「では、こちらへ。」
　マァムは女性たちに促されるまま、隣の部屋に連れていかれた。寝室なのだろう。広々とした部屋に、ベッドや鏡台、タンスなどが置かれていた。いずれもアンティーク調の家具ばかりだ。
　そして、その部屋の真ん中には、湯の張った大きなたらいが置かれていた。
「お召し物を、お脱ぎください。」
「え？」
　マァムが戸惑っていると、女性たちは、思いのほか強い力で、強引に、マァムの服を脱がしにかかった。
「え、ちょっと！」
　マァムは慌てたが、あっという間に、服を脱がされ、たらいに入れられ、体を洗われた。
「あ、あの・・・。」
　そして、その次は、身体を拭かれ、下着類を着せられたかと思うと、その部屋に置かれていた鏡台の前に座らされた。
　その鏡台もまた、重厚な色合いの木で作られており、端々に、繊細な彫刻が施されていた。
　女性たちは、マァムを座らせると、濡れた髪をタオルで拭き、櫛で髪を梳き始めた。

「ま、まって・・・！」
　だが、マァムが何を言おうとも、女性たちは手を止めない。
　マァムの頬に白粉がはたかれ、独特の香りと粒子が周囲を舞う。
　彼女たちの行動の意味も解らず、マァムは、白粉をつけた綿を持つ女性に問いただした。
「な、なんで・・・どういうことなの？
　私をどうするつもりなの？」
　だが、彼女は、眉一つ動かすことなく、答えた。
「お答えできかねます。」
「えっ？」
「私どもも、理由は聞いておりません。ただ、お支度をしろと仰せつかっております。」
「お支度？」
　マァムは、鸚鵡返しに聞き返したが、返事はなかった。
　代わりに、顎を持ち上げられ、上を向かされた。いつの間にか、彼女の手には、紅筆が握られていた。
　マァムは、唇にひんやりとした感触を覚えた。
　女性は、感情を感じさせない声でマァムに告げた。
「お静かに。
　紅がはみ出てしまいます。」
　マァムは、それ以上何も聞けず、されるがままになっていた。
　最後に、マァムは立たされると、頭から衣服をかぶせられた。
　マァムが自分の腕や胸元を確認するように、何度も目をやっていると、女性の一人が彼女に告げた。
「これで終わりです。
　どうぞ、ご覧を。」
　そう言って、マァムを姿見の前に立たせた。
　鏡に映る自分の姿を見て、マァムは驚いた。
　そこには、純白のロングドレスを着て、髪を結い、化粧を施された自分が立っていたのだ。
　ドレスは、ウエストからふんわりと大きく広がっており、たっぷりとした生地が使われていた。
　襟元は大きく開き、だが気品を損なわず、袖は薄手の透ける素材

で作られている。
　光沢のある生地で作られたドレスは共布のフリルで縁取られ、さらに、レースもあしらわれている。
　絵本の中の姫君のような豪華なドレスをまとった自分が立っていた。
　マァムは、状況が飲み込めずに呟いた。
「・・・どういうことなの？」
　だが、女性たちはそれに答えず、ただ、主に許された言葉のみをマァムに告げた。
「どうぞ、こちらへ。
　ヒュンケル様がお待ちでございます。」

　マァムは、純白のドレスを身にまとったまま、玉座の間へと通された。
　玉座の間までは、モルグが案内をした。モルグは、マァムの支度が整うのを待っていたのか、侍女たちから彼女を預かると、彼女の前を歩き、導いた。
　玉座の間に着いたモルグは、前に進み出ると、恭しく右手を折って、頭を下げた。
「お連れ致しました。」
「ご苦労。」
　見ると、玉座に座っていたのは、この城の現在の主、ヒュンケルであった。
　ヒュンケルは、立ち上がると、マァムに近付いた。マァムの目の前に立った彼の服装もまた、普段とは異なっていた。
　ヒュンケルは、まるで、教会に飾られた絵画の騎士のような出で立ちをしていた。
　彼は、詰襟の軍服に、黒いヌバック皮のマントをまとっていた。
　マントの下から覗く襟元は、金のブレードで縁取られている。肩部分には、肩章が付けられており、そこにも、金の縁取り装飾があしらわれていた。グレーを基調とした服地は、ベルベットであろうか、上品な光沢があり、銀色にも感じられた。その上に纏った漆黒のマントが軍服の色を引き立てていた。

ヒュンケルは、余裕を感じさせる笑みを浮かべ、品定めするように、マァムの全身を値踏みした。
「ほう・・・よい出来ではないか。
　思ったよりも、よく似合う。
　これならば、おかしくはないだろう。」
「はい、そう思います。」
　隣でモルグも相槌を打っている。
　だが、ひとり、マァムは全く事態が飲み込めていなかった。
　マァムは、ヒュンケルに食って掛かったように詰問した。
「ヒュンケル！貴方の指示なの？
　これはなに？どういうことなの？
　私をどうするつもりなの？」
「少しは大人しくしていてくれ。
　暴れられたら困る。」
　そう言うと、彼は、マァムの両手を手に取った。
　マァムが腕を引く間もなかった。突然、手首に冷たい感触を彼女は感じた。
「えっ？」
　カシャン、と、冷たい音が無情に響く。
　マァムが己の手元を見下ろすと、そこには、重い手枷がはめられていた。
　腹の前で束ねられた両手首を一体の手枷に入れられ、マァムは手を動かせなくなった。
　突然、己の身に降りかかった危険を感じ、マァムは顔色を変えた。
　だが、ヒュンケルは、表情を変えてはいなかった。
「心配するな。何も、お前を痛めつけようというのではない。ただ大人しくしてもらわないと困る。行く先で暴れられたらかなわん。」
　マァムは、彼の言葉の一つが引っかかり、いぶかしげに聞き返した。
「・・・ヒュンケル？
　行く先って、どこに・・・？」

「お前にとっても関心のあるところだと思うがな。」
　マァムが戸惑った視線をヒュンケルに投げかけていると、彼は当然のように答えた。
「これから、鬼岩城へ行く。お前も一緒にだ。」
「・・・鬼岩城？」
「そうだ。俺たち魔王軍の総本山だ。」
　マァムは息を飲んだ。
　おそらくは、彼ら魔王軍の本拠地があるのだろうとは思っていたが、このような形でそれを知るとは思わなかった。そして、そのような敵陣の中核に赴くことに、背筋が凍る思いがした。
　マァムは己を鼓舞すると、精いっぱいの強がりで聞き返した。
「・・・そんなところに私を連れて行って、大丈夫なの？私は、魔王軍と戦っているのよ。」
　ヒュンケルは、皮肉な笑みを浮かべると、軽く息を吐いた。上から見下すような、圧倒的優位者の態度であった。
　彼は、そのまま、淡々とマァムに語った。
　それは、マァムにとっては、寝耳に水のことであった。
「明日、触れを出す。
　不死騎団長ヒュンケルが、妻を迎えた。
　花嫁の名は、アバンの使徒マァムである、とな。」
　マァムは声にならない悲鳴を上げた。
　先ほどまで感じていた恐怖は吹き飛び、代わりに、怒りと羞恥が沸き起こった。
「なっ・・・！
　ど、どういうことなの！？」
「言葉どおりの意味だ。」
「聞いてないわ！！なんでっ・・・！」
　だが、ヒュンケルは、マァムの抗議など意に介さず、やはり、先ほどと同じように、淡々とマァムに説明をつづけた。
「先ごろ、報告があった。
　パプニカ王家の生き残りレオナ王女が、勇者ダイたちと合流した、パプニカ国民よ、勇気をもって立ち上がれ、魔王軍と戦うべし、となとな。」

その言葉だけで、ダイやポップが生きているのだと、マァムには感じられた。マァムは、目に涙を浮かべ、深く安堵の息を吐いた。
「・・・ダイ。ポップ・・・。よかった・・・。」
「自分は捕らえられているのに、ひとを気遣う余裕があるとは、大したものだな。それも、アバンの使徒所以か？」
　ヒュンケルの皮肉めいた言い方に、マァムは彼をにらみつけた。
「誰だって、仲間を心配するのは当たり前でしょう！？」
　マァムの反論に、ヒュンケルは、冷笑を浮かべ、口の中で笑った。
「なるほど、実に正義の申し子らしい言葉だな。
　そんなお前であればこそ、この触れは、どれほど効果があるだろうか・・・な。」
「・・・どういうこと？」
　マァムの問いに、ヒュンケルは、笑みを崩さずに答えた。
「王女の声明に勇気づけられたパプニカの民は多いのであろうな。
　だが、そこに、こんな知らせが来たらどう思う。
　勇者ダイと同じくアバンの使徒であるはずの娘が、不死騎団長の花嫁に迎えられた、と聞いたらな。」
　そう言い放ち、ヒュンケルは、悠然とした笑みを湛え、マァムを見据えた。
「お前の両親は、勇者アバンとともに戦った仲間だったな。
　その正義のサラブレットであるはずのお前が、不死騎団長の手に落ちた。
　人間でありながら、魔王軍に与する、この俺の手に。
　その知らせは、人間どもの間にどのように響くであろうか。」
　ようやく、マァムはヒュンケルの意図に気付いた。
　結束し始めたパプニカの民の戦意を削ぐ。
　そのために、ヒュンケルは、マァムを花嫁にしたとパプニカ全土に触れ回ろうというのだ。
　マァムは震える声で、ヒュンケルを問いただした。
「あ、貴方は・・・そのために・・・。」
　だが、ヒュンケルは、マァムに応えず、代わりに、無造作に彼女の両手をつかんだ。

枷で束ねられた彼女の両手は、ヒュンケルに引かれると、鋭い痛みを訴えた。
「さて往くぞ。バーン様にご報告せねばなるまい。
　俺も六大軍団長の一人であるからな。
　せいぜい、花嫁らしく振舞ってもらおうではないか。」
　言葉とは裏腹に、そう語る彼の眼差しは、愛しい妻を見つめるものではなかった。まるで、獲物を捕らえた獣のように、ヒュンケルはマァムを見据え、離さなかった。

　高い天井に、広々としたホール。
　規則正しく並ぶ、円柱形の柱。
　足元には、天鵞絨（びろうど）の毛足の長い絨毯。
　柱に備え付けられたランプが、明かりを灯すも、長い影を投げかける。
　その陰影を伴った灯は、そのまま、この場を支配する空気の重さを彷彿とさせた。
　そして、何より、最奥に位置する薄絹の裏から醸し出される、底知れない闇。
　鬼岩城の玉座の間に通されたマァムは、その場のあまりの異様さにごくりと息を飲んだ。
　地底魔城のホールよりもずっと広いこの場には、数多の魔族やモンスターが塑像のように居並ぶ。いずれも、名だたる実力を持った者たちなのであろう。
　ひとりひとりでさえ、威圧感を持った者たちが、ホールの両端に並んでいた。
　彼らが注視する中、中央に敷かれた絨毯の上を、マァムは、ヒュンケルに連れられて歩いていた。
　左右から、敵意、悪意のある視線が一斉に彼女に注がれているのをマァムは感じていた。
　不思議なことに、一部のそれは、マァムだけではなく、ヒュンケルに対しても注がれているように彼女には感じられた。
　だが、ヒュンケルは、涼しげな表情を崩すことはなく、ただまっすぐに、その中央を進んでいった。

そして、ホールの最奥、薄絹のカーテンが設けられたその前にたどり着くと、ヒュンケルは、騎士の礼で膝を折った。
「不死騎団長ヒュンケル、参りました。」
　マァムは喉を鳴らした。背筋を冷や汗が伝う。緊張で喉が渇き、悲鳴をあげていた。
　薄絹の奥に、大きな影が見える。
　不死騎団長であるヒュンケルが、膝を折ってまで礼を払う相手はひとりしかいない。
　この閉じられたカーテンの向こうにいる者が誰であるのか察したマァムは、身を凍らせた。
「ご苦労。」
　威厳のある声が、薄絹の向こうから響いた。
　その奥に見えるのは影だけであったのに、その見えない姿が、いっそう、その場にいる者に圧力を感じさせた。
—大魔王・・・バーン。
　その名を口にすることさえできず、マァムは、胸の内でつぶやいた。
　自分たちの宿敵、魔王ハドラーよりもさらに強力な存在。
　その男が、いま彼女の目の前にいるのだ。
　大魔王の脇、マァムから見て右側に控えた、大柄な魔族の男が、大魔王に報告するように告げた。
「大魔王様。
　先触れのとおり、不死騎団長ヒュンケルが結婚の御裁可を頂きに上がりました。
　妻とする娘を伴って、御前に参上しております。」
「うむ。」
　ヒュンケルたち軍団長よりも大魔王の近くにいるその男は、魔族特有の肌の色をしており、全身を黒のローブで覆っていた。
　マァムは、初めて見たその男に、得体の知れない恐怖を感じていた。
—まさか・・・あれが、ハドラー・・・？
　マァムが身動き一つとれずにいると、今度は、マァムの左脇から、しわがれた老人の声が響いてきた。

「ほう、その娘かの。
　浮いた噂ひとつなかった不死騎団長殿が、突然、妻を迎えたいと上申されたと聞き及んだが・・・人間の娘か・・・。
　これは、これは・・・なかなか可愛らしい娘ではないか。」
　小柄な老人が、マァムを値踏みするように眺め、粗野な笑い声を立てていた。
　マァムは不快気に眉をひそめた。
　それに気づいた訳ではなかったのであろうが、壮年の騎士が、すぐに老人をたしなめた。
「ザボエラ。
　ヒュンケルが、正式に結婚の申し出に来たのだ。水をさすものではない。」
「そうですな。失礼いたしましたな、バラン殿。」
　ふたりの軍団長の後ろからは、白いローブの男が、マァムに冷たい視線を投げかけていた。
　軍団長同士の会話が進む中、突然、薄絹の奥の空気が揺れた。
　途端に、場が静まり返る。
　地の底から響くような低い声が届いた。
「不死騎団長ヒュンケル。」
「はっ。」
　ヒュンケルが、頭を下げる。
「その娘か。
　アバンの弟子であり、アバンとともに戦ったその仲間の娘というのは。」
　バーンの問いかけに、ヒュンケルは頭を下げたまま、うなずいた。
「左様でございます。」
　ヒュンケルは言葉をつづけた。
「この娘も人間ではございますが、私も人間。
　どうぞ、この婚儀のご裁可をいただきたく存じます。」
　ヒュンケルの上申に対し、薄絹の奥から、低い声が響いた。
「お前の申し出を余が許さぬということはあるまい。
　認めようではないか。」

「ありがとうございます。」
　許可が与えられたことに対し、ヒュンケルは、主に礼を述べた。
　次の瞬間、マァムは、突き刺すような視線を感じた。
　絹に隠れて見えないその奥から、真っすぐにマァムを射抜く視線を感じた。姿が見えないにもかかわらず、強い威圧感をマァムは感じた。
　バーンの声が響く。
「だが、まだ手枷が必要なようだな。」
　ヒュンケルは、ちらりとマァムに視線を送ると、再び、バーンに頭を下げた。
「お見苦しい真似をお見せして申し訳ございません。
　いずれ、きちんと躾けて参ります。ですが、本日のところはご容赦を。」
　マァムは、ヒュンケルの物言いにも腹が立ったが、この敵陣真っただ中で、唯一の庇護者と言ってもいいヒュンケルまで敵に回すわけにはいかなかった。
　バーンの嘲笑のような声が聞こえてきた。
「それにしても、考えたものだな。
　アバンの使徒、それも、先代勇者の仲間たちの間に生まれた娘が、お前の妻になったと知れたら、人間どもも嘆くであろう。」
　バーンは、そう言って、低く笑った。
　ヒュンケルは、頭を下げたまま、口の端に不敵な笑みを浮かべ、バーンに答えた。
「何のことでございましょう。
　私は、この娘が気に入っただけでございます。」
　しらじらしい建前を口にするヒュンケルに、バーンは、それ以上の追及はしなかった。ヒュンケルの意図は明確に理解していたが、それをあまりに赤裸々にするのは得策ではないことは、バーンも承知していたからだ。
「まあよい。
　そのようにしておこうではないか。」
　だが、ヒュンケルとバーンのやり取りを前に、不満げな声が上がった。

「・・・アバンの使徒、だと？」
　ヒュンケルは、顔を上げ、立ち上がると、眉をひそめた。声の主に呼びかける。
「何だ、フレイザード。」
「ヒュンケル、てめえ、本気でこの女を妻にしようっていうのか？
　てめえもアバンの弟子だろうが！
　この女を通じて、アバンの使徒のガキどもと通じるつもりじゃねえだろうな。」
「・・・まったく、疑われたものだな。」
「てめえの立場からすれば当然だ。」
　ヒュンケルは大仰にため息を吐いた。
「バーン様の前であまり下品なことをするのは本意ではないが・・・仕方がない。」
　ヒュンケルは、そう言うと、マァムを抱き寄せた。そして、彼女の耳元で、周囲には聞こえない声で囁いた。
「一瞬だ、我慢しろ。」
　マァムは、わけもわからずにヒュンケルを見上げた。
　ヒュンケルは、マァムの顎に手をかけた。
　マァムの瞳に、彼女を見下ろすヒュンケルの暗灰色の瞳が写る。
　ヒュンケルは、瞬く間に、彼女の唇に、己の唇を重ね合わせた。
　マァムは目を見張った。
　塞がれた唇に、冷たい感触が伝わる。
　衆人環視の中、唇を奪われ、マァムは、声を上げることさえできなかった。
　彼は、すぐに唇を離すと、マァムを己の胸に抱きよせた。傍目には、新妻を慈しむ男の姿に見えたことだろう。
　彼は、マァムの面を己の胸に押し付け、周囲の者から隠していた。
　ヒュンケルは、マァムを抱き寄せたまま、己の唇を指の背で拭った。彼の唇にわずかに移った彼女の紅が、ヒュンケルの指を赤く染めた。その紅の色は、散らされた花びらを思わせた。
　彼は、首だけでフレイザードを振り返ると、冷たい眼差しで、同僚の男に視線を送った。

「・・・これでよいか、フレイザード。
　これ以上は、品位に欠ける。」
「チッ・・・勝手にしろ！」
　フレイザードは不快げな声を上げた。
　ヒュンケルは、マァムを抱き寄せたまま、再び、バーンに向き直った。
「バーン様、お許しいただき、ありがとうございます。
　慣れない場に、妻が驚いております故、これにて失礼させていただきます。」
　そうして、彼は恭しく、主に頭を下げた。
　周囲に見えないその中で、マァムは、ヒュンケルの胸に顔を埋めながら、恐怖と屈辱に、その視界を滲ませていた。

イラスト：natsu様

ヒュンケルに抱きかかえられたまま、マァムは地底魔城に帰城した。
　暴れることも、抵抗することもできずにいると、突然、マァムはその身を放り出された。柔らかい感触が彼女の身体を受け止める。
　慌てて身を起こすと、そこは、彼女が最初に身支度を整えられた部屋のベッドの上だった。
　傍らに立ったままのヒュンケルが、彼女を見下ろし、言い放った。
「上出来だったぞ。」
　悠然とした笑みをたたえるヒュンケルをマァムは睨みつけた。毅然とした眼差しで彼を見上げる。
　清烈な視線に射抜かれながら、動じもせずに、ヒュンケルは、マァムに手を伸ばした。
「もうこれは必要なかろう。」
　そう言って、彼女の両手にはめた手枷を外した。
　ようやく自由になった両手に却って違和感を覚えながら、マァムは、己の手首をさすった。
　ヒュンケルは、マァムを見下ろしながら、彼女に告げた。
「バーン様のご裁可もいただいた。
　明日には、人間どもの間に触れも出回る。
　お前は、此処から逃げ出すことはできまい。」
「それはどうかしら・・・？
　私が何をするかわからないと言ったのは、貴方ではなかったかしら？」
「無駄だ。
　お前はもう、人間どもの間に戻れない。」
　突然の宣告に、マァムの胸の中を不安が渦巻いた。マァムはヒュンケルを問いただした。
「どういうこと？」
「先ごろ言ったとおりだ。
　アバンの使徒であり、両親を勇者アバンの仲間に持つお前が、俺の手に落ちたと知れたら、人間どもはどう思うか、とな。」
「そんなの！貴方が勝手にやったことだって思うでしょう！？」

「お前を知る人間はそうだろうな。
　だが、お前を知らない者から見たらどうだ。
　お前に同情をする者もいるかもしれないが、そうでない者も必ず出る。
　現状に不安や不満があれば、はけ口を求めるのが弱い人間どもの習性だ。
　この触れを聞いて、お前が裏切った、アバンの使徒であるのに何事か、と思う者はいるだろうな。」
「そんなの・・・！」
「そのお前が、ダイたちの元に戻ったら、ダイたちはどうなる？
　裏切り者を匿うのか、かばうのか。
　そんな話は出るだろうな。」
　マァムは悔しげに唇を噛んだ。
　そんなはずない、そんなことはあり得ない。
　そう言いたかったが言葉が出なかった。
　悔しさに涙がにじむ目でマァムがヒュンケルをにらみつけると、彼は、皮肉な笑みを浮かべたまま、彼女に告げた。
「何だ。文句があるのか？そんなことは起こらない、とでも？」
　心の中を見透かされたような言葉に、マァムは何も言えなくなった。
　ヒュンケルは構わず、言葉をつづけた。
「お前の周囲にいた人間どもは、少しは品位のあった者たちだったかもしれんな。
　だが、そんな者ばかりではない。
　お前の知らない、浅ましい考えしかできない人間は、必ず存在する。」
　ヒュンケルは、マァムの顎に手をかけると、上を向かせた。至近距離で、マァムの琥珀の瞳をのぞき込む。
「大人しくしていることだな。
　そうすれば、この地底魔城で、最上級の待遇を約束してやろう。
　内実はどうであれ、お前は、俺の妻なのだからな。」
　そう告げると、ヒュンケルは、マァムの部屋を後にした。
　ベッドの上に一人残されたマァムは、唇を噛んだままうつむい

た。
　視界に映る純白のシーツが、滲んで歪み、ぽつりぽつりと、水の跡をつくる。
　マァムは、震える指先で、そっと、己の唇に触れた。まざまざと、ヒュンケルに口吻（くちづけ）られた感触が蘇る。
　初めて触れた男の唇は、羞恥と屈辱しか彼女に与えなかった。
　ふと、手首を見ると、腕輪をつけたように赤紫に変色していた。手枷の跡だった。
　もう外されているはずなのに、くっきりとそこに残された痕は、見えない鎖で彼女をこの城につないでいるようであった。
　手首に残された手枷の痕は、この先の彼女の行く末を示していた。